

原 著

幼児を持つ親の家族エンパワメント尺度の開発

サトウ ミキ* アラキタミカヨ²* カネコ マサユ³* ミワマチヨ⁴*
佐藤 美樹* 荒木田美香子²* 金子 仁子³* 三輪真知子⁴*

目的 本研究の目的は、幼児を持つ親の家族エンパワメント尺度 (Family Empowerment Scale for Parents with Toddlers, 以下 FES-P) を開発し、妥当性と信頼性を検討することである。

方法 まず、先行文献の検討と専門家への面接調査に基づき、尺度原案を作成した。次いで、全国の1~3歳児を持つ親800人 (男性400人, 女性400人) を目標回答数とし、インターネットを活用した構成的質問調査を実施し、FES-Pの妥当性と信頼性を検証した。さらに、再テスト法による再現性と安定性を検討した。

結果 回答の得られた825人 (男性412人, 女性413人) を分析対象とした。因子分析の結果、5因子26項目で各因子の解釈が可能な最適解を得た。5つの下位因子は「家族との関係性」、「育児の効力感」、「地域とのつながり」、「親役割達成感」、「サービスの認知と活用」からなることが確認された。モデルの適合度は、GFI=.878, AGFI=.852, CFI=.943, RMSEA=.044と良好な適合値が得られ、構成概念妥当性が確認された。Cronbach's α 係数は尺度全体で .96, 下位因子では .85~.92であり、十分な内的整合性をもつと判断された。また、FES-P 総得点と Family APGER Score ($r=.562, P<.001$), 育児感情尺度の肯定感 ($r=.620, P<.001$), 特性的自己効力感尺度 ($r=.318, P<.001$) との間には正の相関が認められた。再テスト法による級内相関係数は、尺度全体で $r=.876$, 下位因子では $r=.794\sim.876$ であり、安定性と再現性が確保できた。

結論 本研究では、26項目、5つの下位因子からなる一定の妥当性および信頼性を有する FES-P が開発された。5つの下位因子は相互に関連する構成概念であり、「育児の効力感」と「親役割達成感」は個人的なエンパワメントに関する項目、「家族との関係性」と「地域とのつながり」は他者との関係性に関する項目、「サービスの認知と活用」は社会資源に関する項目で構成されていた。

Key words : エンパワメント, 家族, 親, 育児, 尺度開発

日本公衆衛生雑誌 2020; 67(2): 121-133. doi:10.11236/jph.67.2_121

I 緒 言

わが国では少子化や核家族化の進行、近所づきあいや子どもを通じた付き合いの減少など地域のつながりが希薄化し¹⁾, 地域において育児中の家族を支える力が弱くなっている。健やか親子21や地域子育て支援施策などの虐待予防を含めた幅広い対策により子育ての社会化が進みつつあるが、身近な地域に相談相手がないなど、子育て家庭の孤立した状況

が見受けられる。このような状況は必ずしも個人や家族の問題だけではなく、変化する社会との関係が子育て中の親の孤立した状態を生み出し、孤独感の増大²⁾やサポートの欠如³⁾などが育児の問題に対処することが困難な親のパワーレスな状態を生み出す可能性がある。

エンパワメントは、他者との関係性によって生じるものであり、個人的な側面だけでなく、対人関係・集団・組織・地域社会など多角的な側面をもつとされる⁴⁾。乳幼児を持つ母親を対象とした先行研究では、地域活動の参加により地域の人とのつながりや育児の自信がもたらされること⁵⁾, ソーシャルネットワークと孤独感との関連²⁾が報告されている。子育て期の家族のエンパワメントには他者との関係性が必要であり、自身の存在価値を認められる

* 共立女子大学看護学部

²* 国際医療福祉大学小田原保健医療学部看護学科

³* 慶應義塾大学看護医療学部

⁴* 京都看護大学大学院看護学研究科

責任著者連絡先: 〒101-0051 東京都千代田区神田
神保町 3-27

共立女子大学看護学部 佐藤美樹

ような人の存在が重要となる。具体的には、家族をはじめ、友人、近隣の人、医師や保健師などの専門職、さまざまな場面での支援者などがあげられる。

エンパワメントに関する先行研究では、エンパワメントは親の良い健康状態⁶⁾や自己効力感⁷⁾との関連が報告されている。また、親のエンパワメントと育児サービスへのアクセス⁸⁾や家族サービスへの参加⁹⁾との関連などが報告されている。エンパワメントの測定に関しては、測定する対象は個人のエンパワメントの測定^{10,11)}に関するもの、家族のエンパワメントの測定に関するもの^{9,12,13)}、組織活動やコミュニティ・エンパワメントの評価に関するもの¹⁴⁾などがみられた。家族のエンパワメントを測定する用具はいくつか存在するが、海外の尺度を翻訳したもの^{6,12)}や、障害や疾患を持つ家族のエンパワメント尺度^{9,15,16)}であり、子育て期の家族に活用するには家族関係に関する質問内容が不足していると考えられた。子育て期の家族への支援には、個人と家族や地域社会との関係性に着目していくことが必要であり、家族全体に焦点をあてたエンパワメントの視点¹⁷⁾が必要である。

そこで、本研究は幼児を持つ親の家族エンパワメントを測定する尺度 (Family Empowerment Scale for Parents with Toddlers, 以下 FES-P と略す) を開発し、妥当性と信頼性を検討することを目的とした。

II 研究方法

1. 第1段階：尺度原案の作成

1) 文献検討による質問項目の抽出

子育て期の家族エンパワメントの構成概念を整理し暫定版尺度を作成するため国内外の文献を検討した。

まずは、国内外の先行研究を以下の条件で抽出した。医学中央雑誌および CiNii, PubMed, PsycINFO, CINAHL の5つのデータベースを用い、エンパワメント (empowerment), 家族 (family), 育児 (parenting) をキーワードとして会議録を除き、絞り込み条件を原著論文とし検索した。検索期間は1990年～2017年を設定し、タイトルと抄録にキーワードを含む文献を検索した。文献の採択基準は、家族のエンパワメントおよび子育て期のエンパワメントについての記述がされていること、英語または日本語で記載されていることとした。キーワード検索により抽出した222件について、1次スクリーニングとして表題および抄録の精読を行い、次いで2次スクリーニングとして本文の精読、追加の文献検討を行い候補となる文献を採択した。

質問項目の抽出手順は、まず文献検討により対象

となった論文について、子育て期の家族エンパワメントにかかわる内容が記述されていると文献から読み取れる部分をアイテムプールとして取り出した。次に意味内容の類似性に基づき、カテゴリー化を行った。さらに家族エンパワメントを説明する仮説的な枠組みを作成し、子育て期の家族エンパワメント尺度 (暫定版) を作成した。

2) 尺度原案の作成

文献検討により作成した暫定版尺度について、改良に向けた内容の過不足ならびに妥当性を検討し、FES-P 原案を作成するため、地域看護学および家族看護学を専門とする大学教員5人と行政機関に勤務している保健師6人の2つのグループにフォーカスグループインタビュー (FGI) を実施した。

インタビュー内容は、暫定版尺度の改良に向けた内容の過不足ならびに内容妥当性に関する意見である。得られた意見により、家族エンパワメントに関する内容を精選して質問項目を検討した。

3) 尺度原案の表面妥当性の検討

尺度の表面妥当性を確保するため、さまざまな経験年数と専門領域を持つ看護職15人にプレテストを行い、回答における不具合や表現のわかりにくさ等について意見を聞き、質問項目の表現等を修正した。最後に研究者間で修正を行った。

2. 第2段階：FES-P の妥当性・信頼性の検討

第2段階は、調査1と調査2からなる。

1) 調査対象の選定理由

本研究では、未就学児のうち子育てに困難が生じやすい時期であり、かつ家族で協力が必要な時期と考えられる1～3歳児を持つ親を調査対象とした。選定理由は、未就学児のうち3歳児未満の約7割が在宅で子育てをしている¹⁸⁾現状があること、また0歳児は育児休業が認められていることや乳児健診等の育児支援が手厚い時期であることから対象から除外した。

2) 調査1：FES-P の開発

(1) 調査対象

全国に在住する1～3歳児を持つ親を対象とし、男性・女性それぞれ400人、計800人を目標回答数とした。回答者数の設定根拠は、 $\alpha=0.05$ 、検出力 $(1-\beta)=0.8$ と設定し、回答者数を設定した。G*powerver3.1では、効果量0.5を検出するのに必要なサンプル数は126以上、効果量0.2では394以上であったため、目標サンプル数を父親・母親それぞれ400人ずつを調査対象とした。

(2) 調査方法

調査方法はインターネット調査会社の登録モニターを対象としたインターネットを用いた構成的質

問調査による横断研究であった。調査対象は、調査会社の20～50歳代の登録モニターである。調査期間は2018年5月10日～12日であった。調査方法は、調査対象である20～50歳代は年代的にインターネットを使用する世代であること、全国に居住する調査対象を選定可能であること、母親だけでなく父親の回答が得やすいことなどから尺度開発の目的には適したものとして選択した。

(3) 調査項目

① 基本属性（個人の要因、地域の要因）

親の性別と年齢、子どもの性別と年齢、学歴、世帯収入、職業、家族構成、育児情報の情報源、地域での付き合いの程度、地域活動の参加経験の有無等を尋ねた。

② 幼児を持つ親の家族エンパワメントの質問項目 前述した自作のFES-P原案60項目を用いた。

③ 基準関連妥当性の検討に用いた外部基準変数

a. Family APGER Score

Family APGER Scoreは、1978年Smilkstein¹⁹⁾により報告された簡便な家族機能尺度であり、妥当性と信頼性は確認されている²⁰⁾。家族の構成員が自分の家族についてどう感じているのかを問う5項目の質問内容で構成されている。10点満点で採点し、得点が高いほど良好な家族機能を有していると評価する。Family APGERの項目および下位概念の和訳は塩川ら²¹⁾の文献を参考にした。Family APGER Scoreは家族の関係性に関する構成概念を測定していることから、FES-Pと正の相関を示すと考えられ、外部基準変数になりえると判断した。

b. 育児感情尺度

育児感情は、荒牧ら²²⁾の育児感情尺度を用いた。この尺度は、育児への肯定感（子どもを育てることや子どもの存在自体を肯定的にとらえる感情）が4項目、負担感（育児による負担感・態度へのイライラ）が6項目、不安感（子どもの育ち・育て方への不安感）が6項目の合計16項目で構成される。「全くない」、「あまりない」、「時々ある」、「よくある」の4件法で測定し、得点が高いほど各感情が高いことを示す。本尺度の信頼性²³⁾と妥当性²⁴⁾は報告されている。下位概念の育児肯定感、育児不安感、育児負担感はFES-Pと正の相関を示すことが考えられ、育児不安感および育児負担感は負の相関を示すことが考えられ、外部基準変数になりえると判断した。

c. 特性的自己効力感尺度

自己効力感、Shererら（1982）の自己効力感尺度を翻訳し、わが国のコミュニティサンプルへの適用と妥当性、信頼性が確認されている成田ら²⁵⁾の23項目の特性的自己効力感尺度を使用した。本尺度

は、具体的な個々の課題や状況によらない一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感であり、人格特性的な認知傾向を測定できる。「そう思う（5点）～そう思わない（1点）」の5件法で測定し、得点が高いほど自己効力感が高いことを示す。自己効力感、個人のエンパワメントの構成要素であることから、FES-Pとは正の相関を示すと考えられ、外部基準変数になりえると判断した。

(4) 分析方法

回答者のデータは、個人が特定できないようにIDコード化を行い、分析には統計ソフトSPSS Statistics 25とAmos 25を使用した。解析データの有意水準は5%未満とした。すべての変数について記述統計量を算出した。

① 項目分析

FES-P原案60項目について、平均値と標準偏差を算出し、天井効果および床効果を確認した。また、項目-全体得点相関（I-T相関）分析、項目間相関を検討し項目を精選した。

② 探索的因子分析による構成概念の検討

探索的因子分析は、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値1以上の因子数を採用し、因子負荷量が.40を基準とし、2つ以上の因子に高い負荷を持つ項目を削除しながら分析を行った。

③ 確認的因子分析によるモデルの作成

探索的因子分析の結果をもとに、共分散構造分析を用いた確認的因子分析を行った。まず、理論的構成概念妥当性を確認するため、5つの下位因子ごとのモデル適合度を確認した。次に、尺度全体のモデルの適合度を確認した。適合度指標は、 χ^2 値、GFI（Goodness of Fit Index）、AGFI（Adjusted Good of Fit Index）、CFI（Comparative Fit Index）、RMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）、AIC（Akaike Information Criterion）とした。モデル内で測定誤差間の修正指数が10以上となった場合には共分散を設定した。

④ 多母集団同時分析による男女の配置不変性の検討

確認的因子分析で得られたFES-Pを構造的に分析するために、2次の因子モデルを設定し、因子不変性の有無を検討した。次にモデルの配置不変性を検討した。パス係数の統計学的な有意性は、検定統計量Critical ratio（以下C.Rと略す）の絶対値が1.96（5%有意水準）以下とした。

⑤ 基準関連妥当性の検討

基準関連妥当性の検討をするため、Family APGER Score、育児感情尺度、特性的自己効力感尺度

との相関係数を算出した。

⑥ 信頼性の検討

因子分析の結果をもとに、家族エンパワメント尺度全体と各因子のCronbach's α 係数を算出し、内的整合性を評価した。

3) 調査2:再テスト法

(1) 調査対象

調査対象は、全国に在住する1~3歳児を持つ親、男性・女性それぞれ100人、計200人を目標回答数とした。

(2) 調査方法

調査1で開発したFES-Pの安定性に関する再テスト信頼性を検討するため、インターネット調査会社のモニターを対象にインターネットを用いた構成的調査を実施した。調査期間は、1回目は2018年8月8日~9日、2回目は2週間後の8月22日~23日であった。再テスト法の1回目の調査から2回目の調査までの間隔は2週間とした。1回目と2回目ともに回答のあったものを分析対象とした。

(3) 調査項目

① 基本属性

親の性別と年齢、子どもの性別と年齢、学歴、世帯収入、職業、家族構成を尋ねた。

② 家族エンパワメント

家族エンパワメントの質問は、調査1で作成したFES-P (26項目)を用いた。

(4) 分析方法

1回目と2回目のFES-P総得点および下位因子得点の級内相関係数 (intraclass correlation coefficient: ICC) を求め、再現性を検討した。

4) 倫理的配慮

調査対象には、インターネット調査会社が説明文書をメールで送付し、調査に回答することをもって同意とみなした。個人情報を除いたデータのみ研究者に送付された。本研究は、国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した (承認年月日: 2018年3月29日, 承認番号: 17-Ig-133)。

Ⅲ 研究結果

1. 第1段階: 尺度原案の作成

1) 文献検討による質問項目の抽出

文献検討の結果、国外の論文6件^{6~9,17,19)}、国内の論文6件^{10~12,26~28)}、計12件を採択した。対象となった文献について、採択基準の内容が読み取れる部分をアイテムプールとして抽出し、「A 家族の問題の認識と共有 (19項目)」、「B 育児情報の獲得や資源の活用 (25項目)」、「C 育児の効力感 (8項目)」、「D 親としての役割達成感 (8項目)」の4つの仮説

的な枠組みを作成し、57項目の暫定版尺度を作成した。

2) 尺度原案の作成と表面妥当性の検討

専門家へのFGIの結果、「家族の機能に関する項目」「子どもの成長を共有できる項目」などが不足しているとの意見が挙げられた。不足項目について、公衆衛生看護および地域看護の研究者等と検討を重ね、追加の文献検討、質問項目の修正を行い、FES-P原案を作成した。さらに内容妥当性の検討を行い、本研究における幼児を持つ親の家族エンパワメントとは、「親が育児上の問題に気づき、気づいた問題を他者と共有し、問題解決への意思決定、情報の獲得や資源の活用を通して、内発的に動機づけられ、家族で力を合わせて問題解決ができている状態である」と定義した。評価方法は、「かなり当てはまる (7点) ~全く当てはまらない (1点)」の7件法のリッカート方式とした。これらのプロセスにより、尺度原案は60項目となった。

2. 第2段階: FES-Pの妥当性・信頼性の検討

1) 調査1: FES-Pの開発

(1) 回答者の基本属性 (表1)

インターネットで1~3歳児を持つ親を対象に目標回答数800人 (男性400人, 女性400人) を募集し、募集期間内に825人から回答が得られた。そのうち男性は412人, 女性は413人であった。未回答項目はなかったため、825人を分析対象とした。

回答者の全体の平均年齢は36.8 $\pm$ 5.9歳であり、男性は39.1 $\pm$ 6.1歳, 女性は34.5 $\pm$ 4.7歳であった。家族構成は子ども1人の世帯は326人 (39.5%), 子どもの平均人数は1.79 $\pm$ 0.78人であった。世帯の収入は300~500万円未満が257人 (31.2%) ともっとも多く、次いで500~700万円未満が225人 (27.3%) であった。収入なしは12人 (1.5%) であった。地域での何らかの付き合いがある者は696人 (84.4%), 付き合いのない者は129人 (15.6%) であった。参加している地域活動がある者は506人 (61.3%), ない者は319人 (38.7%) であった。

(2) FES-P原案の項目分析

FES-P原案60項目の各質問項目の得点平均値は3.15~5.51点, 標準偏差は1.17~1.85点であり、天井効果と床効果を示す項目はなかった。I-T相関分析の結果、相関係数は.38~.82で.2未満の削除項目はなかった。信頼性の検討では、60項目のCronbach's α 係数は.980であり、1項目ずつ削除したCronbach's α 係数はすべての項目で.980以上であったことから、内的整合性を脅かす項目はなかった。項目間相関では.90を超えていた1対を意味内容の類似性から検討し、1項目を削除した。

表 1 回答者の基本属性

変 数	カ テ ゴ リ ー	全体 ($n=825$)	男性 ($n=412$)	女性 ($n=413$)
		n (%) or Mean $\pm$ SD	n (%) or Mean $\pm$ SD	n (%) or Mean $\pm$ SD
年齢 (歳)		36.8 $\pm$ 5.9	39.6 $\pm$ 6.1	34.5 $\pm$ 4.7
年齢区分	～29歳	74 (9.0)	18 (4.3)	56 (13.6)
	30～34歳	247 (29.9)	89 (21.6)	158 (38.3)
	35～39歳	245 (29.7)	115 (27.9)	130 (31.5)
	40～44歳	177 (21.5)	114 (27.7)	63 (15.3)
	45歳～	82 (9.9)	76 (18.4)	6 (1.5)
家族構成	核家族	714 (86.5)	366 (88.8)	348 (84.3)
	拡大家族	94 (11.4)	44 (10.7)	50 (12.1)
	ひとり親	15 (1.8)	0 (0.0)	15 (3.6)
	その他 (単身赴任)	2 (0.2)	2 (0.5)	0 (0.0)
子どもの人数	1 人	326 (39.5)	158 (38.3)	168 (40.7)
	2 人	371 (45.0)	188 (45.6)	183 (44.3)
	3 人	105 (12.7)	57 (13.8)	48 (11.6)
	4 人	20 (2.4)	6 (1.5)	14 (3.4)
	5 人以上	3 (0.3)	3 (0.7)	0 (0.0)
子どもの平均人数		1.79 $\pm$ 0.78	1.81 $\pm$ 0.78	1.78 $\pm$ 0.78
子どもの性別	男児	427 (51.8)	232 (56.3)	195 (47.2)
	女児	398 (48.2)	180 (43.7)	218 (52.8)
子どもの年齢	1 歳	215 (26.1)	106 (25.7)	109 (26.4)
	2 歳	290 (35.2)	142 (34.5)	148 (35.8)
	3 歳	320 (38.7)	164 (39.8)	156 (37.8)
親の学歴	中学卒業	21 (2.5)	7 (1.7)	14 (3.4)
	高校卒業	194 (23.5)	97 (23.5)	97 (23.5)
	高専・短大卒業程度	91 (11.0)	17 (4.1)	74 (17.9)
	専修学校卒業	88 (10.7)	40 (9.7)	48 (11.6)
	大学卒業	380 (46.1)	209 (50.7)	171 (41.4)
	大学院修了	51 (6.2)	42 (10.2)	9 (2.2)
親の職業	正社員・正規職員	433 (52.5)	363 (88.1)	70 (16.9)
	嘱託・契約社員	15 (1.8)	6 (1.5)	9 (2.2)
	派遣社員	9 (1.1)	3 (0.7)	6 (1.5)
	パート・アルバイト	76 (9.2)	3 (0.7)	73 (17.7)
	自営業	41 (5.0)	34 (8.3)	7 (1.7)
	仕事はしていない	251 (30.4)	3 (0.7)	248 (60.0)
世帯収入	100万円未満	13 (1.6)	2 (0.5)	11 (2.7)
	100～200万円未満	23 (2.8)	8 (1.9)	15 (3.6)
	200～300万円未満	57 (6.9)	20 (4.9)	37 (9.0)
	300～500万円未満	257 (31.2)	131 (31.8)	126 (30.5)
	500～700万円未満	225 (27.3)	110 (26.7)	115 (27.8)
	700～1,000万円未満	161 (19.5)	85 (20.6)	76 (18.4)
	1,000～1,500万円未満	59 (7.2)	40 (9.7)	19 (4.6)
	1,500万円以上	18 (2.2)	12 (2.9)	6 (1.5)
	収入はない	12 (1.5)	4 (1.0)	8 (1.9)
地域での子どもを通じた付き合いの程度	子どもを預けられる人がいる	286 (34.7)	148 (35.9)	138 (33.4)
	子どもをしかったり、注意してくれる人がいる	193 (23.4)	86 (20.9)	107 (25.9)
	子どもを連れて家を行き来する人がいる	264 (32.0)	105 (25.5)	159 (38.5)
	立ち話をする程度の人がある	317 (38.4)	123 (29.9)	194 (47.0)
	子どもを連れて、一緒に出かける人がいる	177 (21.5)	67 (16.3)	110 (26.6)
	子育ての悩みを相談できる人がいる	289 (35.0)	103 (25.0)	186 (45.0)
	あいさつをする人がいる	454 (55.0)	206 (50.0)	248 (60.0)
	子どもを通して関わっている人はいない	129 (15.6)	80 (19.4)	49 (11.9)
参加している地域活動	自治会や町内会	344 (41.7)	192 (46.6)	152 (36.8)
	子供会などの地域活動	257 (31.2)	143 (34.7)	114 (27.6)
	子育てサークル	248 (30.1)	83 (20.1)	165 (40.0)
	趣味のサークルやクラブ (文化・学習など)	121 (14.7)	63 (15.3)	58 (14.0)
	子育て以外のボランティア活動	84 (10.2)	52 (12.6)	32 (7.7)
	その他の団体 (NPO や NGO など)	34 (4.1)	18 (4.4)	16 (3.9)

表2 FES-Pの探索的因子分析と確認的因子分析の結果

n = 825

因子名	仮説 枠組 み ^(注3)	質 問 項 目	探索的因子分析結果 (FES-P36項目)					確認的因子分析結果 (FES-P26項目) ^(注6)		
			因子負荷量					※ ^(注5) 採択 項目	標準化 推定値	Cronbach's α 係数 subscal overall
			第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子			
第 1 因子： 家族との関 係性	A	01_子どもに関する問題は家族で話し合うようにしている	.98	-.09	-.10	.02	-.03	※	.82	
	A	13_私の家族は、お互いに信頼しあっている	.91	-.01	.04	-.09	-.01	※	.88	
	A	10_私の家族は、家族で助け合うことを大切にしている	.89	.00	.01	-.03	.00	※	.89	
	A	02_育児の悩みは一人で抱え込まないようにしている	.87	-.10	-.03	.04	.00	—	—	
	A	32_育児の困りごとは、家族で相談し対処している	.85	-.04	-.13	.24	-.03	—	—	
	A	03_私の家族は、お互いを気遣っている	.78	-.17	.10	-.06	.03	—	—	
	A	51_子どもに関する問題が起きた際には家族と相談して対応を決める	.77	.23	-.01	-.09	.00	—	—	.92
	A	12_家族にねぎらいの言葉をかけるようにしている	.71	.02	.08	-.06	.06	—	—	
	A	30_育児の状況を家族と共有できる	.68	.06	-.16	.27	.04	※	.79	
	A	50_育児の問題解決の必要性を家族と共有している	.67	.26	-.01	.03	-.02	—	—	
	A	11_家族と一緒に食事をする時間を作っている	.62	.22	.11	-.19	-.04	※	.73	
	D	59_育児をすることで家族のきずなが強まったと感じる	.56	.19	.10	.13	-.07	—	—	
B	04_家族の健康を守るために気を付けていることがある	.56	.12	.12	-.02	.01	※	.73		
第 2 因子： 育児の効力 感	B	47_子どもに健康上の問題が起きた際には対処できると思う	-.05	.92	-.01	-.01	.03	—	—	
	C	41_子どもが発熱したときは適切な対処ができると思う	-.01	.83	.00	-.05	-.01	※	.72	
	B	46_子どもの体調の変化に気づくことができる	.06	.83	-.01	-.05	.02	※	.81	
	C	42_子どもの成長に応じて、子どもへの関わり方を変えている	.05	.75	.02	.03	.01	※	.80	.91
	C	44_育児で困ったことがあっても何とかかなると思う	.13	.70	-.08	.06	.02	※	.81	
	C	43_親のかかわりに子どもは満足していると思う	.01	.54	.11	.20	-.04	※	.80	
	C	45_育児をすることで自分も成長したと感じる	.12	.50	.05	.23	-.01	※	.83	.96
第 3 因子： 地域とのつ ながり	B	55_育児をすることで地域のひととの付き合いは増えた	-.06	.02	.93	-.09	-.03	※	.75	
	B	54_地域での催し物やイベントに参加している	-.09	.05	.83	.03	-.07	※	.72	
	B	53_同じ地域で育つ子どもの成長も楽しみにしている	.01	.06	.78	.05	-.03	※	.85	
	B	56_育児の困りごとを家族で解決できないときは他者に支援を求める	.13	-.02	.59	.02	.11	※	.73	.89
	B	07_交流できる育児仲間がいる	.06	-.10	.52	.09	.12	※	.61	
	B	52_子どもを持つ他の家族とかかわる機会を大切にしている	.16	.22	.51	.00	-.03	※	.79	
	B	20_必要な時に助けを求めることのできる友人や隣人がいる	.14	-.12	.42	.15	.14	—	—	
第 4 因子： 親役割達成 感	D	28_子どもの成長について先の見通しが持てるようになったと思う	-.09	.06	.03	.87	.01	※	.85	
	D	26_親として子どもに良い育児環境がつくれていると思う	.07	-.01	.03	.83	-.02	※	.89	
	D	25_育児をすることで親としての自信が持てるようになった	.01	.00	.09	.82	-.07	※	.87	.92
	D	27_育児をすることで仕事や生活にハリが出てきたと思う	.11	-.08	.03	.77	.00	※	.83	
	A	29_子どもに関する問題が起きた際にどうすればよいかわかっている	-.08	.19	-.04	.69	.10	—	—	
第 5 因子： サービスの 認知と活用	B	17_利用できる育児支援サービスの内容を理解している	-.01	.11	-.07	-.04	.95	※	.95	
	B	16_育児支援サービスを探すことができる	.09	.12	-.04	-.08	.85	※	.89	.85
	B	18_育児支援サービスを利用している	-.08	-.11	.07	.05	.74	※	.69	
	B	36_子どものことを相談できる専門職がいる	-.02	-.18	.28	.18	.42	※	.56	
固有値			17.81	2.15	1.56	1.15	1.06			
回転後の負荷平方和			15.60	13.73	11.37	13.26	8.19			
因子間相関 ^(注4)										
第 1 因子			—							
第 2 因子			.75	—						
第 3 因子			.58	.59	—					
第 4 因子			.70	.67	.67	—				
第 5 因子			.50	.43	.56	.54	—			

注1) FES-P: Family Empowerment Scale for Parents with toddlers

注2) 因子抽出法: 最尤法 回転法: Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

注3) 仮説枠組み: A 家族の問題の認識と共有, B 育児情報の獲得や資源の活用, C 育児の効力感, D 親としての役割達成感

注4) 因子間相関: Pearsonの相関係数を算出

注5) ※: 確認的因子分析の結果 FES-Pを構成する項目として抽出された26項目

注6) モデルの適合度: χ^2 (df=290) = 1,078.66, $P < .001$, GFI = .906, AGFI = .870, CFI = .951, RMSEA = .057, AIC = 1,200.66

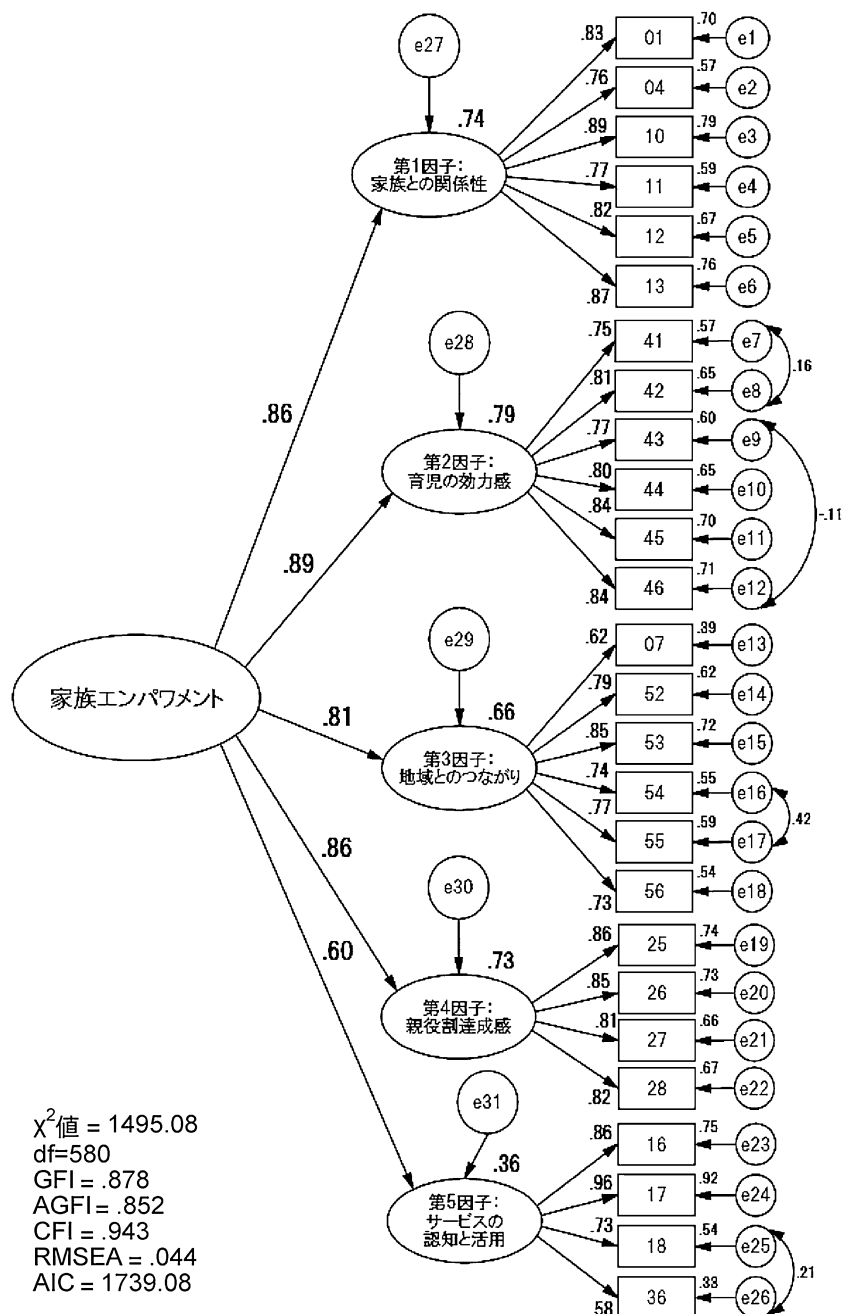
(3) 探索的因子分析による構成概念の検討 (表2)

選定した59項目を用いて、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、最終的に23項目が削除され、36項目5因子の最適解を得た。各因子に属する項目は.42～.98の因子負荷量を示した。因子間の相関係数は.43～.75であった。

抽出された5因子について、各因子を構成する質問項目の内容を解釈して命名した。第1因子は、「01_子どもに関する問題は家族で話し合うようにしている」や「13_私の家族は、お互いに信頼しあっている」といった13項目で構成されていることから「家族との関係性」と命名した。第2因子は、「44_

育児で困ったことがあっても何とかできると思う」や「45_育児をすることで自分も成長したと感じる」など7項目で構成されていることから「育児の効力感」と命名した。第3因子は、「07_交流できる育児仲間がいる」や「54_地域での催し物やイベントに参加している」など7項目で構成されることから「地域とのつながり」と命名した。第4因子は「25_育児をすることで親としての自信が持てるようになった」や「28_子どもの成長について先の見通しが持てるようになったと思う」など5項目から構成されることから「親役割達成感」と命名した。第5因子は、「18_育児支援サービスを利用している」や

図1 FES-Pの2次因子モデルの多母集団同時分析結果(男性)



「36_子どものことを相談できる専門職がいる」など4項目から構成されることから「サービスの認知と活用」と命名した。

(4) 確認的因子分析によるモデルの検討

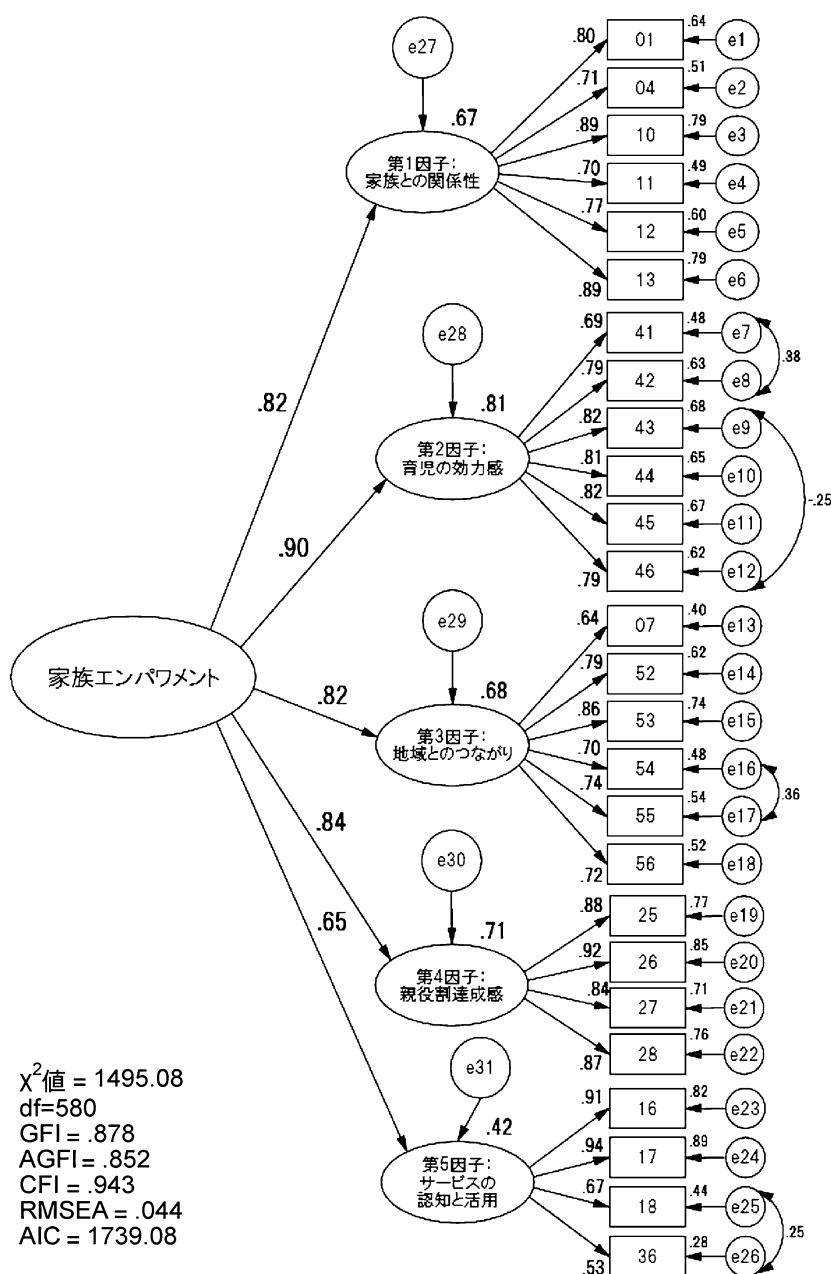
探索的因子分析で得られた36項目のFES-Pの理論的構造を確認するために、各項目を観測変数、各因子を潜在変数としたモデルを設定し、確認的因子分析（最尤法）による下位因子ごとのモデルの検討を行った。修正指数と改善度を参考に χ^2 値の低下がみられた項目の削除と共分散を加えて修正し、モデルの改良を行ったところ、36項目のうち10項目が削除され、5因子26項目からなるFES-Pが構築された（表2の※の質問項目）。因子間の相関は.52

～.79と中程度から比較的高い相関が認められたため、モデルは家族エンパワメントを2次因子、抽出された5つの下位因子を1次因子とする2次因子モデルを仮定した。モデルの適合度は、 χ^2 (df=290) = 1078.66, $P < .001$, GFI = .906, AGFI = .870, CFI = .951, RMSEA = .057, AIC = 1200.66であった。2次因子から1次因子へパス係数、1次因子から項目（観測変数）へのパス係数はいずれも統計学的に有意であった ($P < .001$)。

(5) 多母集団同時分析による検討（図1、図2）

男性と女性における因子構造の配置不変性を検討するため、等値制約を課さない多母集団同時分析を行った。その結果、すべてのパス係数と共分散が有

図2 FES-Pの2次因子モデルの多母集団同時分析結果（女性）



意であり、モデルの適合度は χ^2 (df = 580) = 1495.08, $P < .001$, GFI = .878, AGFI = .852, CFI = .943, RMSEA = .044, AIC = 1739.08で適度な適合度が示された。FES-Pの男性と女性における配置不変性が確認された。

C.R.を算出した結果、家族エンパワメントと第1因子がC.R. = 0.38, 第2因子がC.R. = -0.05, 第3因子がC.R. = -0.01, 第4因子がC.R. = 0.63, 第5因子がC.R. = 1.51であった。いずれも1.96 ($P < .05$)を超えない値であった。

(6) 妥当性の検討 (表3)

基準関連妥当性を検討するために、FES-P総得点と外部基準変数との相関分析を行った。その結果、Family APGER Score (Pearson's $r = .527$, $P < .01$), 育児感情尺度の肯定感 ($r = .620$, $P < .01$), 特性的自己効力感尺度 ($r = .318$, $P < .01$)との間には正の相関が認められた。

また、FES-Pの関連要因について、以下の分析を行い、尺度の妥当性を検討した。FES-P総得点と有意な関連が見られた個人の要因は、全体では世帯収入 ($P < .001$), 多重比較では、世帯収入が「1,500万円以上」(133.7 ± 26.2)の世帯は「収入はない」(102.1 ± 32.3), 「100万円未満」(103.5 ± 38.9)の世帯と比べて、FES-P総得点が有意に高かった ($P < .05$)。地域の要因では、全体ではすべての質問項目で有意差が見られた。地域での子どもを通じての付き合いの程度は、「付き合いがある人」(123.7 ± 23.9)は「付き合いのない人」(101.9 ± 26.7)に比べて、FES-P総得点が有意に高かった ($P < .001$)。地域活動については、子育てサークルに「参加している人」(130.6 ± 23.5)は「参加していない人」(115.8 ± 25.2)に比べて、FES-P総得点が有意に高かった ($P < .001$)。

(7) 信頼性の検討 (表2)

FES-Pの信頼性分析の結果、Cronbach's α 係数は

表3 FES-P総得点と外部基準変数との相関

$n = 825$

	FES-P
Family APGER Score	.527**
育児感情尺度	
肯定感	.620**
負担感	-.233**
不安感	-.151**
特性的自己効力感	.318**

** $P < .01$

注1) FES-P: Family Empowerment Scale for Parents with toddlers

注2) 相関係数: Pearsonの相関係数を算出

26項目全体で.96であった。下位因子におけるCronbach's α 係数は第1因子が.92, 第2因子が.91, 第3因子が.89, 第4因子が.92, 第5因子が.85を示し、十分な内的整合性が得られた。

2) 調査2: 再テスト法

(1) 回答者の概要

再検査法を用いて、調査1とは別サンプルの200人(男性100人, 女性100人)に対して安定性の評価を行った。1回目, 2回目ともに回答の得られた148人(回収率74%)を分析対象とした。

(2) 信頼性の検討 (表4)

再テスト法による1回目と2回目のFES-P総得点と下位因子の平均得点, 標準偏差 ($\pm$ SD), ICCは表4に示したとおりである。ICCは尺度全体では $r = .876$ ($P < .001$)であった。また, 下位因子では $r = .794 \sim .876$ ($P < .001$)で, 第4因子と第5因子が $r = .794$ ($P < .001$)と最も低く, 第3因子が $r = .876$ ($P < .001$)と最も高かった。

IV 考 察

1. 回答者の代表性

本研究の回答者は, 1~3歳児を持つ親で, 男女比はほぼ同数であり, 平均年齢は36.8歳であった。子どもの属性の内訳からは, 子どもの人数の平均は1.79人, 子ども1人の世帯は39.5%であり, 全国の児童(18歳未満の未婚の者)のいる世帯の平均児童数1.71人, 児童1人の世帯が44.3%²⁹⁾であることと比較すると, 大きな違いは見られなかった。家族形態については, 全国平均では親族世帯に占める核家族世帯の割合は82.7%²⁹⁾, 本研究では86.5%であり, 幼児を持つ家族として妥当な集団であると考え

表4 再テスト法におけるFES-P平均得点と相関

$n = 148$

	平均得点 (SD)		級内相関係数		
	1回目	2回目	相関係数	95%信頼区間	
尺度全体	124.8(26.5)	124.9(26.7)	.876***	.828	.910
第1因子: 家族との関係性	32.2(6.4)	31.9(6.3)	.832***	.768	.879
第2因子: 育児の効力感	29.1(6.5)	30.0(6.5)	.838***	.777	.883
第3因子: 地域とのつながり	28.0(7.3)	28.1(7.1)	.876***	.828	.910
第4因子: 親役割達成感	18.5(4.9)	18.5(5.0)	.794***	.715	.851
第5因子: サービスの認知と活用	17.0(5.9)	17.4(5.7)	.794***	.715	.851

*** $P < .001$

注1) FES-P: Family Empowerment Scale for Parents with toddlers

られた。

2. FES-Pの妥当性と信頼性の検討

内容妥当性の検討は、尺度原案作成の段階で複数の専門家による意見聴取・評価を得ることによって、各項目の適切性を確保することができた。また、FES-P総得点および5つの下位因子得点とFamily APGER Score、育児感情尺度、特性的自己効力感尺度との相関係数から、基準関連妥当性が確保されていると判断できた。

構成概念に関しては、尺度原案の段階では4つの仮説枠組みを想定していたが、因子分析により、5因子構造であることが検証された。尺度原案の仮説枠組みの「B育児情報の獲得や資源の活用」はFES-Pの第3因子と第5因子の2つに因子に分かれた。育児中の親にとってのサポート資源には、保健センター、保育園や幼稚園など様々な供給主体がある。また、このような親子を取り巻く支援に限らず、当事者が主体となった取組も求められる。そのため、第3因子は地域の人との関係に関する内容であり、第5因子は地域の社会資源に関する内容を表しているため、2つの因子への変更が適切であると考えられた。また、確認的因子分析を行った結果、4つの質問項目間に誤差相関が認められたが、それぞれの質問項目間の類似性から説明が可能であることが確認された。以上のことから、下位因子の領域変更はあったが、5つの構成概念を命名することができ、共分散構造分析の適合度は、CFI .90以上、RMSEA .05以下であることから、本尺度は適合度が良好であるといえ、一定程度の構成概念妥当性が確認された。

信頼性の検討は、内的整合性の確認と再テスト信頼性の検討により評価した。尺度全体および下位因子のCronbach's α 係数は.80以上あり、十分な内的整合性が確認された。再テスト法によるICCは、尺度全体では $r=.876$ 、下位因子では $r=.794$ 以上であり、安定性と再現性が確保できた。

3. FES-Pの構成要素

家族エンパワメントを構成する5因子として、「家族の関係性」「育児の効力感」「地域とのつながり」「親役割達成感」「サービスの認知と活用」が抽出された。久保³⁰⁾は、エンパワメントのプロセスを第1のレベルの心理的・個人的エンパワメントが基本となり、第2のレベルの対人的エンパワメントを獲得し、第3のレベルである社会的エンパワメントに至り、各レベルが相互に関連して展開していくと説明している。FES-Pの下位因子に含まれる質問項目を熟考すると、「育児の効力感」と「親役割達成感」は個人的エンパワメントに関する項目、「家族

の関係性」と「地域とのつながり」は他者との関係性に関する項目、「サービスの認知と活用」は社会資源に関する項目で構成していると捉えることができた。また、5つの下位因子間の相関係数は中程度から高い正の相関を示していたことから、相互に関係しあい影響することが明らかにされた。

これらの結果から、家族をエンパワメントする支援には、5つの構成概念から対象の状況を把握し、育児に対する思いや育児の状況を聞きながら気づきを促し、周囲のサポート資源や必要なサービスをアセスメントし、家族の力を引き出していく³¹⁾ことの必要性が示唆された。

4. FES-Pの看護実践での活用可能性

FES-Pの特徴としては、次の4点があげられる。1つ目は質問項目数が26項目と調査対象に大きな負担をかけずに短時間で回答できることである。2つ目は5つの下位因子の質問内容には個人の自覚・行動から家族・地域との関係性まで含まれており、親の自覚を促す内容で構成されていることである。3つ目は多母集団同時分析によって、男性と女性における配置不変性が確認されたことから、母親だけではなく父親にも同じ質問項目で測定が可能なことである。4つ目は親の自覚を促すとともに、支援者が家族と一緒に家族エンパワメントを確認できる内容で構成されていることである。

活用の場については、次の3点が考えられる。1つ目は自治体で実施する母子保健事業における個別支援での活用である。これまでの乳幼児健康診査は、母親の支援が中心であり、父親が同行しても育児相談は母親に対してなされる場合がほとんどであった。FES-Pを母親とともに父親にも活用することで、父親の支援にもつながることが考えられ、乳幼児健康診査を含めた様々な保健事業に参加している父親への直接支援を含めた家族全体の支援を検討するためにも有用である。2つ目は、次の支援プロセスにつなぐ際が多職種連携での活用である。5つの因子から構成されていることにより、具体的な課題の検討が可能となり、家族の状況や支援の方針を共有する際に有用である。3つ目は、子どもの発達や育児不安を持つ親子が参加する育児教室などのグループ支援事業での活用である。グループ支援事業への参加は、親の成長や家族機能の改善^{26,32)}、育児仲間との交流によるエンパワメント^{26,27,32)}が報告されている。その評価にFES-Pを活用することで、サービスを利用前後の親子の変化と事業の評価の双方に活用が可能である。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究にはいくつかの限界が存在する。本研究で

はインターネット調査会社を活用した構成的質問調査を用いることで、全国の1~3歳児をもつ20~50歳代の年齢層の親を対象に調査を実施することができた。しかし、インターネットを利用しない人や回答するために必要な技術が不十分な人は研究参加者として除外されてしまう可能性があり、属性の偏りが考えられることが本研究の第1の限界といえる。第2の限界は、尺度の活用にあたって、パワーレスな状態の家族の支援の必要性をアセスメントするためのカットオフ値を設定するなど、一定の得点基準を検討する必要があることである。

今後の課題としては、子育て支援に幅広く活用できるものにしていくために、乳幼児健康診査の評価指標としての活用や育児相談等の面接場面での活用などを併用し、実証研究を積み重ね対象を拡大するとともに、尺度の質問項目の表現の修正や検討を重ね精度を高める必要がある。しかしながら、本研究では、幼児を持つ親の家族エンパワメントを測定する5つの概念を明らかにし、かつそれは父親・母親両者に活用可能なFES-Pを開発した点で独創性を有する研究であると考えられる。

本研究の調査にご協力くださいました皆様に心より感謝いたします。本研究は科学研究費基盤C（研究代表者佐藤美樹）の助成を受けて行いました。本論文の内容に関連し、著者全員について、開示すべきCOI関係にあたる企業等はありません。

(受付 2019. 6. 5)
(採用 2019.10.15)

文 献

- 1) 内閣府. 平成19年度国民生活白書 つながりが築く豊かな国民生活. 東京: 時事画報社. 2007; 1-8.
- 2) 佐藤美樹, 田高悦子, 有本 梓. 都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因—乳幼児の年齢集団別の検討. 日本公衆衛生雑誌 2014; 61: 121-129.
- 3) 久保美紀. ソーシャルワークにおける Empowerment 概念の検討—Power との関連を中心に—. ソーシャルワーク研究 1995; 21: 94-99.
- 4) 野嶋佐由美. エンパワメントに関する研究の動向と課題. 看護研究 1996; 29: 453-464.
- 5) 川崎千恵. 乳幼児を育てる母親が認識する地域活動への参加によりもたらされるものと地域活動の特性. 日本公衆衛生看護学会誌 2017; 6: 19-27.
- 6) Vuorenmaa M, Halme N, Perala ML, et al. The validity and reliability of the Finnish Family Empowerment Scale (FES): a survey of parents with small children. Child care health and development 2013; 40: 597-606.
- 7) Freiberg K, Homel R, Brach S. The Parent Empowerment and Efficacy Measure (PEEM): A tool for Strengthening the Accountability and Effectiveness of Family Support. Journal Australian social work 2014; 67: 405-418.
- 8) Vuorenmaa M, Halme N, Perala ML, et al. Perceived influence, decision-making and access to information in family services as factors of parental empowerment: a cross-sectional study of parents with young children. Scandinavian Journal of Caring Sciences 2016; 30: 290-302.
- 9) Koren PK, Dechillo N, Friesen BJ. Measuring empowerment in Families Whose Have Emotional Disabilities: A Brief Questionnaire. Rehabilitation Psychology 1992; 37: 305-321.
- 10) 有吉正則, 山田 孝. 「知的障害がある子どもを育てる母親の子育てエンパワメント質問票」の信頼性・妥当性の検討. 作業療法 2012; 31: 463-472.
- 11) 亀田幸枝, 島田啓子. 妊婦のエンパワメントスケールの作成 (Development of an empowerment scale for pregnant women). 金沢大学つるま保健学会誌 2008; 32: 39-48.
- 12) 涌水理恵, 藤岡 寛, 古谷佳由理, 他. 障害児を養育する家族のエンパワメント測定尺度 Family Empowerment Scale (FES) 日本語版の開発. 厚生指標 2010; 57: 33-41.
- 13) Man DW, Lam CS, Bard CC. Development and application of the Family Empowerment Questionnaire in brain injury. Brain in journal. 2003; 17: 437-450.
- 14) 中山貴美子. 保健専門職による住民組織のコミュニティ・エンパワメント過程の質的評価指標の開発. 日本地域看護学会誌 2007; 10: 49-58.
- 15) Singh NN, Curtis WJ, Ellis CR, et al. Psychometric Analysis of the Family Empowerment Scale. Journal of emotional and behavioral disorders. 1991; 3: 85-91
- 16) Akey TM, Marquis JG, Ross ME. Validation of scores on the Psychological Empowerment Scale: a measure of empowerment for parents of children with a disability. Educational and psychological measurement. 2000; 60: 419-438.
- 17) リーサ・カプラン, ジュディス・L・ジラルド (小松源助監訳). ソーシャルワーク実践における家族エンパワメント—ハイリスク家族の保全を目指して. 東京: 中央法規出版. 2001; 21.
- 18) 厚生労働省. 保育所等関連状況取りまとめ (平成30年4月1日). 2018.
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000176137_00002.html (2019年8月1日アクセス可能).
- 19) Smilkstein G. The family APGAR: a proposal for a family function test and its use by physicians. The Journal of Family Practice 1978; 6: 1231-1240.
- 20) Smilkstein G, Ashworth C, Montano D. Validity and reliability of the family APGAR as a test of family function. The Journal of Family Practice 1982; 15: 303-311.
- 21) 塩川宏郷, 宮本信也, 柳沢正義. 小児科入院児の養育者とのかわりに関する考察「養育者アセスメント」

- の試み. 子どもの心とからだ 1993; 2: 91-97.
- 22) 荒牧美佐子. 育児への否定的・肯定的感情とソーシャル・サポートとの関連: ひとり親・ふたり親の比較から. 小児保健研究 2005; 64: 737-744.
- 23) 荒巻美佐子. 育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因: 幼稚園児を持つ母親の場合. 東京学芸大学紀要 2003; 55: 83-93.
- 24) 荒牧美佐子, 無藤 隆. 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い: 未就学児を持つ母親を対象に. 発達心理学研究 2008; 19: 87-97.
- 25) 成田健一, 下仲順子, 中里克治, 他. 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る. 教育心理学研究 1995; 43: 306-314.
- 26) 望月由妃子, 杉澤悠圭, 田中笑子, 他. 親支援プログラム (Nobody's Perfect) を活用した虐待予防事業の評価と今後の課題に関する研究. 小児保健研究 2013; 72: 737-744.
- 27) 原田紀子. 子育てをしている母親のサポートグループを通したエンパワーメント. 看護研究 1996; 29: 47-57.
- 28) 中谷奈津子. 地域子育て支援拠点事業利用による母親の変化: 支援者の母親規範意識と母親のエンパワメントに着目して. 保育学研究 2014; 52: 319-331.
- 29) 厚生労働省. 平成29年国民生活基礎調査の概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa17> 2018.11.1 (2019年8月1日アクセス可能).
- 30) 久保美紀. エンパワーメント概念の構造に関する研究—ソーシャルワーク実践理論としてのエンパワメントの模索. 明治学院論叢 2001; 110: 175-195.
- 31) リーサ・カプラン, ジュディス・L・ジラルド (小松源助監訳). ソーシャルワーク実践における家族エンパワーメント—ハイリスク家族の保全を目指して. 東京: 中央法規出版. 2001; 71-77.
- 32) 頭川典子, 北山秋雄. 育児に悩む母親に対するグループプログラムの効果: 母親の変化と家族関係の変化に着目して. 小児保健研究 2011; 70: 371-379.
-

Development of the Family Empowerment Scale for Parents with Toddlers

Miki SATO^{*}, Mikako ARAKIDA^{2*}, Masako KANEKO^{3*} and Machiko MIWA^{4*}

Key words : empowerment, family, parents, parenting, scale development

Objectives This study aimed to develop the Family Empowerment Scale for Parents with Toddlers (FES-P) and to examine its validity and reliability.

Methods A draft version of the scale was prepared based on a literature review and interviews with experts. Next, we conducted a web-based structured questionnaire survey of 800 parents (400 men and 400 women) with children aged 1 to 3 years, across Japan, and then verified the validity and reliability of the FES-P. The repeatability and stability by the retest method were examined as well.

Results We analyzed the data of the 825 individuals (412 men and 413 women) who answered the survey. Exploratory and confirmatory factor analyses revealed that the optimum solution that can interpret each factor could be obtained with five sub-factors and 26 question items. We confirmed that the five sub-factors were “relationships within the family,” “sense of efficacy with regard to parenting,” “relationships with the community,” “sense of achievement as a parent,” and “recognition and combined use of services.” Good-fit values were obtained, with GFI=.878, AGFI=.852, CFI=.943, and RMSEA=.044, and construct validity was confirmed. The Cronbach’s alpha coefficient was .96 for the entire scale and .85 to .92 for the sub-factors; the scale was deemed to have sufficient internal consistency. Further, the total score of the FES-P was positively correlated with the Family APGER score ($r=.562$, $P<.001$), scale measuring feelings about parenting ($r=.620$, $P<.001$), and generalized self-efficacy scale ($r=.318$, $P<.001$). For test-retest reliability, the intra-class correlation coefficient was $r=.876$ for the entire scale and $r=.794$ to $.876$ for the sub-factors, indicating stability and reproducibility.

Conclusion This study developed the FES-P, consisting of five sub-factors and 26 items and showing good validity and reliability. The five sub-factors were cross-correlated constructs. “Sense of efficacy with regard to parenting” and “sense of achievement as a parent” consisted of items related to individual empowerment, “relationships within the family” and “relationships with the community” consisted of items related to relationships with others, and “recognition and combined use of services” consisted of items related to social resources.

^{*} Faculty of Nursing, Kyoritsu Women’s University

^{2*} School of Nursing and Rehabilitation Science at Odawara, International University of Health and Welfare

^{3*} Faculty of Nursing and Medical Care, Keio University

^{4*} Kyoto College of Nursing Graduate School of Nursing